

芥川龍之介

鼻





鼻



禅智内供ぜんちないぐの鼻と云いえば、池の尾で知らない者はない。  
 長さは五六寸あつて上うわくちびる脣の上から顚あごの下まで下つてい  
 る。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰め  
 のような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っている  
 のである。

五十歳を越えた内供は、沙弥しやみの昔から、内道場供奉ないどうじょうぐぶの  
 職のぼに陞のぼった今日こんにちまで、内心では始終この鼻を苦に病んで  
 来た。勿論もちろん表面では、今でもさほど気にならないような

顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰かつごうすべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それより寧むしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌いやだつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧おそれていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食う時にも独ひとりでは食えない。独りで食えば、鼻の先がかなまり銚すいの中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の

一人を膳ぜんの向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰もらう事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子ちゆうどうじが、嚏くさめをした拍子に手がふるえて、鼻を粥かゆの中へ落した話は、当時京都まで喧伝けんでんされた。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷きずけられる自尊心の為に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供の  
為に、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻で  
は誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中に  
は又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さえ  
あつた。しかし内供は、自分が僧である為に、幾分でも  
この鼻にわずらわ煩わづらわされる事が少くなつたと思つていない。内  
供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実<sup>きそん</sup>に左右さ  
れる為には、余りにデリケートに出来ていたのである。  
そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損  
を恢復かいふくしようとして試みた。



第一に内供の考えたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、ほおづえ頬杖をついたりあご頤の先へ指をあてがったりして、根気よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分で満足する程、鼻が短く見えた事は、これまでにただ唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、かえつ却て長く見えるような気さえした。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにな

め息をついて、不承不承に又元の経机へ、かんのんぎよう観音経をよみに帰るのである。

それから又内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、そうぐんこうせつ僧供講説などのしばしば屡行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なくすき建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従ってここへ出入する僧俗の類もたぐい甚はなはだだ多い。内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子すいかんもかたびらはいらない。ましてこうじいろ柑子色の帽子

や、椎鈍しいにびの法衣ころもなどは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。——しかし鍵鼻かぎばなはあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重たびなるに従って、内供の心は次第に又不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年としが甲斐いもなく顔を赤あからめたのは、全くこの不快に動かされての所しよ為いである。

最後に、内供は、内典ないてんげてん外典げてんの中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしよ

うとさえ思つた事がある。けれども、目連もくれんや、舍利弗しやりほつの鼻が長かつたとは、どの経文にも書いてない。勿論りようじゆ竜樹りようじゆや馬鳴めみようも、人並ついでの鼻を備えた菩薩ぼさつである。内供は、震旦しんたんの話の序ついでに蜀漢しよくかんの劉玄徳りゆうげんとくの耳が長かつたと云う事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どのくらい自分は心細くなくなるだろうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でも殆ほとんど出来るだけの事をした。烏瓜からすうりを煎せんじて飲んで見た事もある。鼠ねずみ

の尿いばりを鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと脣の上  
にぶら下げているではないか。

ところが或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子の僧が、知己しるべの医者から長い鼻を短くする法を教わつて来た。その医者ちようらくじと云うのは、もと震旦から渡つて来た男で、当時は長樂寺ちようらくじの供僧になつていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは気にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の

度毎に、弟子の手数をかけるのが、心苦しいと云うような事を云った。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はずはない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極きわめて、この法を試みる事を勧め出した。すすそうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従する事になった。

その法と云うのは、唯、湯で鼻を茹ゆでて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提ひさげに入いれて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷やけどする惧おそれがある。そこで折敷おしきへ穴をあけて、それを提の蓋ふたにして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹った時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤のみの食つたようにむず痒がゆい。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまま湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下うへしたに動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時時気の毒そうな顔をして、内供の禿はげ頭を見下しながら、こんな事を云つた。



——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。ところが鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼うわめを使って、弟子の僧の足に輝あかぎれのきなれているのを眺めながら、腹を立てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。実際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て気もちのいい位だったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒あわつぶのようなものが、

鼻へ出来はじめた。云わば毛をむしった小鳥をそっくり丸灸まるやきにしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云った。

——これを鑷子けぬきでぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をあぶらをして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂

をとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎のような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。  
と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大し

た変りはない。内供はその短くなつた鼻を撫なでながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極きまりが悪るそうにおずおず覗いて見た。

鼻は——あの顚の下まで下つていた鼻は、殆ほとんどうそ嘘ざんぜんのよざんぜんうに萎縮いしゆくして、今は僅わずかに上脣の上で意気地なく残喘ざんぜんを保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏あまれた時の痕あとであろう。こうなれば、もう誰わらも晒わらうものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻が又長くなりはしないかと云う不安があつた。そこで内供は誦經ずぎょうする時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく脣の上に納まつているだけで、格別それより下へぶら下つて来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供は先ます、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書写ほけきょうの功を積んだ時のような、のびのびした気分になつた。

ところが二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見し

た。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑おかしそうな顔をして、話も碌々ろくろくせず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。それのみならず、嘗かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかつた下法師しもほうしたちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではな

い。

内供は始はじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。——勿論、中童子や下法師が晒わらう原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒わらうにしても、鼻の長かった昔とは、晒わらうのにどことなく容ようす子ががちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽こっけいに見えると云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのようにつけつけとは晒わらわなんだて。

内供は、誦ずしかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時時こう呟つぶやく事があつた。愛すべき内供は、そう云う時になると、必かならずぼんやり、傍かたわらにかけた普賢ふげんの画像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶おもい出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。

——内供には、遺憾いかんながらこの問に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところが



その人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気にさえなる。そうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日毎に機嫌きげんが悪くなつた。二言目には、

誰でも意地悪く叱りつける。しまいには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳貪ほうけんどんの罪を受けられるぞ」と陰口をきく程になった。殊ことに内供を怒らせたのは、例の悪戯いたずらな中童子である。或曰、けたたましく犬の吠えほる声ができるので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片きれをふりまわして、毛の長い、瘦やせた尨犬むくいぬを逐おいまわしている。それも唯、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囃はやしながら、逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したた

かその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げはなもたの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなつたのが、反かえつて恨めしくなつた。

すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸ふうたくの鳴る音が、うるさい程枕かよに通つて来た。その上、寒さもめつきり加わつたので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻が何時になく、むず痒かゆいのに気がついた。手をあてて見ると少し水気すいきが来たようにむ

くんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花こうげを供えるような恭うやうやしい手つきで、鼻を抑えながら、ここう眩くらいた。

翌朝、内供が何時ものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏いちようや椽とちが一晩の中に葉を落したので、庭は黄金きんを敷いたように明あかるい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい朝日に、九輪くりんがまばゆく光っている。禪智内供は、蔀しとみを上げた縁に立って、深く息をすいこんだ。

殆、忘れようとしていた或感覚が、ふたたび再内供に帰って来たのはこの時である。

内供は慌あわてて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜ゆうべの短い鼻ではない。上脣の上から顚あごの下まで、五六寸あまりもぶら下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなったのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなった時と同じような、はれはれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいな

い。

内供は心の中でこう自分に囁ささやいた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。







日本文学電子図書館

---

羅生門・鼻

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社  
昭和43年7月20日発行

---



日本文学電子図書館